

RE : 03

— ふえらりいず すとおりに —





「じゃあ二人とも準備は良いかい？」

「はいっ」

「はい……はい……」

「ん？ ひふみちゃん？ 浮かない顔だね どうしたんだい？」

「あ……その……なにが……かは……分らないんです……けど……」

「コッして……なにが違うような……」

わしっ

「とてつもなく……ダメなコトをしているような……不安感みたいなモノが……」

「HA HA HA!! それは気のせ……」

「なに言ってますか ひふみ先輩!!」

「うほっ……」

「奴隷のように働き続けなければいけない社員の皆さんが
意欲を持って仕事に集中できるように一時でも癒しの時間を
というコトで企画されたこの社内新プロジェクト『PERO』
ひふみ先輩はそれを主導するフェラ班のフェラリーダーに任命されたんです
とても名誉なコトじゃないですか！」

にぎにぎ

「私も全力でフォローしますから期待に応えられるように一緒に頑張らしましょうよ！」
「ん……そう……なの？……ん？……うん……うん……」
「なんだかまだ腑に落ちない感じもするけど……これで良いんだよね……」
「(ていうか青葉ちゃん……誰見で言ってるの……それにそのヤル気……なんかコロコロ……)」





「でも・・・わたし・・・その・・・こういう経験・・・なくて・・・
 ちゃんと出来るか・・・どうか・・・」
 「だいじょーぶ！ 三人がちゃんと汚ちゃんぽをペロペロして気持ち良く出来るのかっ?!
 それを確認するために今回オジさんがスペシャルアドバイザーとして雇われたってわけだ」
 「出来なくてもちゃんと教えてあげるから心配しなくてイイよ」
 「あ・・・はっ・・・」
 「よろしくお願ひしますっ」

「てか青葉ちゃん・・・」
 「はい？」
 「さっきから当然のように握ってるその手・・・」
 「そろそろ止めてくれないかな・・・じやないと・・・」
 「じやならっ」

ぐに
 ぐに
 ぷん

ぴん

ぴん



「もう まだなんにもしてないに出しちゃってるじゃないですか
こんなんで本当に大丈夫なんですか？」
「大丈夫 大丈夫！ 青葉ちゃん達みたいなのカワイイ女の子を前にしたら
何度だって不死鳥の如く蘇るんさあ！」
「こっこの子はなんか変な方向に振れちゃったかもしれないな……」
「今 一瞬青葉ちゃんから得体の知れない妖気を感じたような……やっぱりコワイっ!!」

「本当ですか？ それじゃあこのまま続けちゃっても大丈夫ですよわっ」
「だっ、大丈夫だよ……」
「じゃあ私がいち早く汚口で汚ちゃんほ気持ち良くてきくか確かめようかな」

「それにしてもこの汚ちんぽ。。。すっごく臭いんですけど。。。恥垢もいっぱい付いてますし。。。」

「今日のヨト分かってたハズなのに、ちゃんと洗ってこなかったんですか？」

「女の子にわざと恥垢だらけの臭くて汚れた汚チンポを舐めさせようとするなんて人間のクズですね。。。」

「あ。。。はい。。。ごめんなさい。。。」

「このガキ。。。初対面の人間をクズ呼ばわりするなんて。。。オジさん大興奮じゃないかっ!!」

（潜在的にSっ気が強かったせいだろうな）

スー
スト

「まあ、何日も泊り込んでお風呂にも入ってないゲロクツ汚ちんぽをぶら下げて来る人もいるかもしれませんし

そのシミュレーションだと思えば問題無いですかねえ」

「それに。。。こんなに臭いのには。。。なんだかこのニオイ嗅いでから

少し興奮しちゃってるみたいなんですよね。。。嫌いじゃないなあ。。。このニオイ。。。」

「はああ。。。それじゃあペロペロ始めますね。。。」

「あ。。。お願いします。。。が。。。まあエエか」

（なんだかいつの間にか主導権を握られてしまっている。。。）

「気持ち良くしちゃうついでにキレイに汚掃除もしてあげますね。・・・れるっ。・・。」

「ああ。・・・ニオイが鼻から抜けちゃって臭すぎてクラクラしてきちゃいます」
「あはっ。・・・汚ちんぼの汚れが唾液で溶けてヌルヌルデロデロしてきました。・・。」

「んれるっ。・・・全部舌先でこそぎ取ってあげますね。・・・んっ。・・・なる。・・・れるっ。・・。」

「はぁあ」
「ビクッ」

「ねりねり」
「わろわろ」
「んっ」

「んんっ。・・・すごくにがしよっぱい。・・・でもこれ。・・・ちよると美味しいかも。・・。」
「よし。・・・食べちゃってもイイですか？ イイですよね？ 食べちゃいますね。・・。」
「えっ？ ・・・ああ。・・・うん。・・。」
「ああ。・・・美味しい。・・・こんなの絶対美味しくないハズなのに。・・・汚ちんぼのカスなのに。・・。」
「頭の奥から痺れてきちゃいます。・・。」
「。・。こいつあやべえな。・・。とんだ変態さんだ。・・。」



「んはっ。。。オジさんの大きすぎて。。。先っぽ啜えてペロペロするので精一杯。。。です。。。」
「先っぽの割れ目の中也キレイにしておきますね。。。れる。。。れる。。。」
「あっ。。。そこは優しくね。。。敏感だから。。。」
「大丈夫。。。任せてください。。。ちゃんとインターネットで色々勉強して来ましたから。。。」
「でも私が見た動画や画像にはこんなに大きい汚ちんぽは無かったけど。。。」
「大きいだけで気持ちイイ場所なんかは一緒のハズだから大丈夫。。。だよな？」
「(エッチなモノたくさん見て私もエッチな気分になっちゃったけど」
「汚仕事だから集中するために汚マ○コ弄るのもガマンして勉強したんだ。。。」
「その成果をしっかりと出さなきゃ。。。」

「んっ！ そろそろイキそうだよ青葉ちゃん！」
「えっ?! もうですか?! さっき出したばかりなのに?!」
「このまま汚口に出すね! 全部中で受け止めてね!」
「しかたないですね。。。どうぞ。。。」
「ああ! イクっ! 出るよ! 汚口に出すよっ!!」

「本当に早漏さんなんですね。。。」

あむん

わろわろ

はむはむ

んっ





「!!」

「んぐっ・・・せーしってこんなに飲みにくいモノだったんですね・・・」
「それに思ってたよりずっと臭い・・・青臭い・・・ような磯臭いような・・・
臭いけど・・・なんだかすごくエツチなニオイ・・・」
「とても気持ち良かったよ青葉ちゃん ちゃんと予習してきたんだね」
「これならすぐに汚仕事を始めても大丈夫だよ」

はな

しんぼ

はな

「本当ですか?! 良かったあ 極太魚肉ソーセージで練習してきた甲斐がありました!」
「(そんなモノで練習してきたのか・・・)」
「私が合格ってコトは・・・じゃあ次はひふみ先輩の番ですね」

「えっ……あっ……でも……私……」
「青葉ちゃんみたいだ……予習も……練習もしてない……し……
うまく……できない……と……思う……から……」
「大丈夫 さっきも言ったけどちゃんと教えてあげるよ」
「そ……それに……やっぱり……ヨシを……く……回に入れる……なんて……」
（しかもあんなモノまで飲むなんて……やっぱり私には……）

うんうん

んん

んん



「ひっ！」

「大丈夫です 私がキレイにしておいたので、もう臭くないハズです」

「そういう問題じゃっ……うっ！」

（うえっ!! 臭い……臭いよっ……）

（確かに汚れはマシになったのかもしれないけど……ニオイが……青葉ちゃんの……青葉ちゃんのだれが乾き始めて逆にスゴク臭くなっちゃってるよお……）

ヒッ
グッ

「ほらほら ひふみ先輩 ペロペロしちゃってください
練習して一緒に立派なペロリストになりましょう！」

（私そんなモノになりたくないよ……でも……これが私の汚仕事なんだよね……
青葉ちゃんだって頑張ってるんだから……私も頑張らないと……なんだよね？）

ひっ

うっ

グッ

「こ……どうですか……？」

「うん……そんな感じ……まずは舐めるコトに馴れようね」

「気持ち良いとかそんなのは後回し 好きなように自分のペースで舐めて」

「……はい……」

「かり首の裏にあるスジを中心に刺激してあげると気持ち良いらしいですよ」

「オジさんもさっきそこ舐める度にピクピクしてましたし」

「……ここ……らへん……？」

「おうぶっ！」

「……っ！！ ああ……すごい……ピクンって跳ねた……気持ち良い……のかな？」

「あっ……なんか先っぽから透明でヌルヌルしたのが……」

「なにこれ……少ししょっぱくて……美味しい……かも……」

「なんかノツてきましたねひふみ先輩 すごく美味しそうにスロスロしていますよ」
「っ?! おっ……美味しくなんか……ない……」
「まあまあ 照れなくても良いじゃないですか 透明な汚汁……私も美味しかったですし」
「なっ?! バレてる……恥ずかしい……」
「舐めるのに馴れてきたのなら今度はオジさんの目を見つめてあげましょう」
「男の人は見つめられたまま汚ちんぽ啜えられるのがたまらなく良いらしいですよ」

はせ
はあ

ん

ん

ん

ん

ん



「……んんん」

(ぐはっ！ 確かにたまらんっ！)

(あっ……なんか更に硬く……。やっぱり見つめられると良いんだ……。すごいな……。青葉ちゃん……)

「たまに先っぽや根元の方まで舌を這わせてあげるのも忘れないうでござい」

「うん……。こんな感じ……。かな……」

(俺の出番無えなおい……。がしかしぐっじよぶ青葉ちゃん！)

(この透明な美味しいヌルヌルを全体に塗り広げれば……。もっと気持ちよさそう……)

はあ

あ

「すごいじゃないですかひふみ先輩 すごく上手なんじゃないですか？
だっさっきからオジさんのビクビクが止まらないですもん」
「ホント？ ちゃんと……。出てる……。んんん」
「上手だよひふみちゃん ちゃんと気持ち良いよお……」
「そうなんだ……。私ちゃんと出てるんだ……。ちよっとうれしいかも……」
「それじゃあ次は唾えちやいませうよ」
「ひふみ先輩がどんな顔で汚ちんぽ唾えるのか見てみたいです」

んんん

ビク

ビク

「んんん」





「はむっ……んぐっ……んっ……ぬるっ……ねるっ……」
 (ああ……大きい……やっぱり私も先っほしか寝えられない……)
 「はああ……ひふみ先輩が……ひふみ先輩が汚ちんぽ寝てる……」
 「そ……そんなに……見ないで……恥す……かし……」
 「ああ……とてもエッチいです……ひふみ先輩のフェラ顔……とてもエッチいですよお……」
 「そ……そんなコト……ない……私……」
 「エ……エッチな顔なんて……してない……よお……」
 「ああ……もうダメです……やっぱり我慢できない……私も一緒にっ……はむん……」

ぬんぬん
 はむん



「あ、こら青葉ちゃん、ひふみちゃんが練習してるのに邪魔しちゃダメでしょ？」
「無理です……ちゅぶ……とても我慢なんてできませんよお……ちゅぶ……」
「あ……青葉ちゃん……」
「ああ……ひふみ先輩のよだれが垂れてきて……ひふみ先輩の味……」
「そんな……やだ……私のよだれを……」
「ひふみ先輩のよだれソースがかかった汚ちゃんぽ美味しいです……」
「もう青葉ちゃんたらあ、しょうがないなあ」
「じゃあ二人で仲良くおしやぶりしてもらおうかな」
「ふあー」

「ひふみちゃんも大分馴れてきたみたいだね」
「汚ちゃんほに吸い付く顔がどんどんエッチくなってきているよ」
「この調子なら立派にフェラリダーも務められそうだね」
「んっ。。。本当ですか？ それなら。。。良かった。。。です」



「わ。。。私。。。今そんなにエッチな顔してるの？」
「どんな顔で汚ちゃんほに吸い付いてるの？。。。自分じゃわからない。。。」
「でも。。。青葉ちゃんも。。。エッチな顔してる。。。私もこんな。。。」
「青葉ちゃん。。。はもう全然話聞いてないねえ。。。」



「ああ……すいぢ……ひふみ先輩のよだね……甘く美味し……
もっ……もっ……もっ……と噛めたい……」

「このまま上に行けばひふみ先輩の汚口が……
ああ……あの汚口から直接……」
「ひふみ先輩……ひふみ先輩……ひふみ先輩……せんばあい……」

ん

あふ

ゆるゆる

ん

ん

ん

ん



「ああ!! チュウ!! ひふみ先輩とチュウ!! 汚ちゃんほ越しに... ひふみ先輩とチュウ!!」
「私の初めてのチュウ... 汚ちゃんほ越しに... ひふみ先輩と初チュウしちゃったあ...」
「ああ... 私も... 初めて... だったのに...」

「ひふみ先輩のよだれ... 甘くて... 美味しかったので... つい...」
「青葉ちゃん...」



「あめ……ひみぢちゃん……ごほごほいようじょうで言っただけ
嘘せちやっただねえ……初めてだから仕方ないか……」
「ほほっ……ほほっ……ご……ごめん……さい……ほほっ……」
「じゃあ代わりに青葉ちゃん 残ったお汁を全部吸い取ってくださるか？」
「はいっ……了解ですっ」

はな
はな

はな

はな
はな

ピクピク
ピクピク





「ひふみ先輩・・・お口開けてください・・・
自分で飲みたいですが・・・私の分もさし上げます・・・」

「あっ・・・そんな・・・んっ・・・」

「私の上だれもいっばい混ぜときますんで一緒に飲んでくださいね・・・んべえ・・・」

「んんっ・・・んっ・・・んあ・・・」

「さあ・・・飲んでください・・・せーし飲んでください・・・
せーし飲んでるひふみ先輩の顔が見たいです・・・」

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

でりぞろお

んあ



んぐっ……「きゅ……きゅ……んぐっ……んり……んぐ……」
「ああ……飲んでる……ひふみ先輩がせーし飲んでる……」
（んぐっ……本当だ……すごく喉にからんでる……飲みたへら……）

「もっと見せてください せーし飲んでるひふみ先輩の顔……もっと見せてください」
「すーい……せーし飲んでるひふみ先輩の顔……とってもエツテです……」
（音……葉……ちゃん……）

はあ

はあ

はあ
ゴクッ

グミ
グミ

グミ
グミ

んぐ

